

No.56 2002.3
(株)よかネット

NETWORK

ひともうけ通信10

地域計画運動の原点は“グンゼ” “郡是”にあり

—明治の郡是・町村是運動の現代的意義— 2

東山魁夷画伯の思い出に包まれた筑豊絵本館

～先生と生徒の“思い”から、全国唯一の絵本館ができるまで～ 6

「まちづくり情報銀行」はまちづくりの拠点

～地域コミュニティづくりの取り組み④～ 8

見・聞・食

働く障害者・働きたい障害者の応援拠点～ジョブサポート～ 10

民設。でも公共スペース『宮崎公会堂』②

～山口県阿武町発 ふるさとあったか便～ 12

地元沸き上がり型のイベント小倉の食市食座で食べ歩き 13

地域のファンで支えられたまちづくり

～長府、仙崎の町並みを歩いて～ 15

近況

ビールは一番絞り、さとうきびは三番絞り 16

小麦は深く繊細で、粉に巻くよりグルテンに巻こう～アジア麺文化研究会 17

300坪の小宇宙……「こだわりの塊」博物館探検隊員募集 18

「奇術」のおかげで首が少しだけ楽になった 20

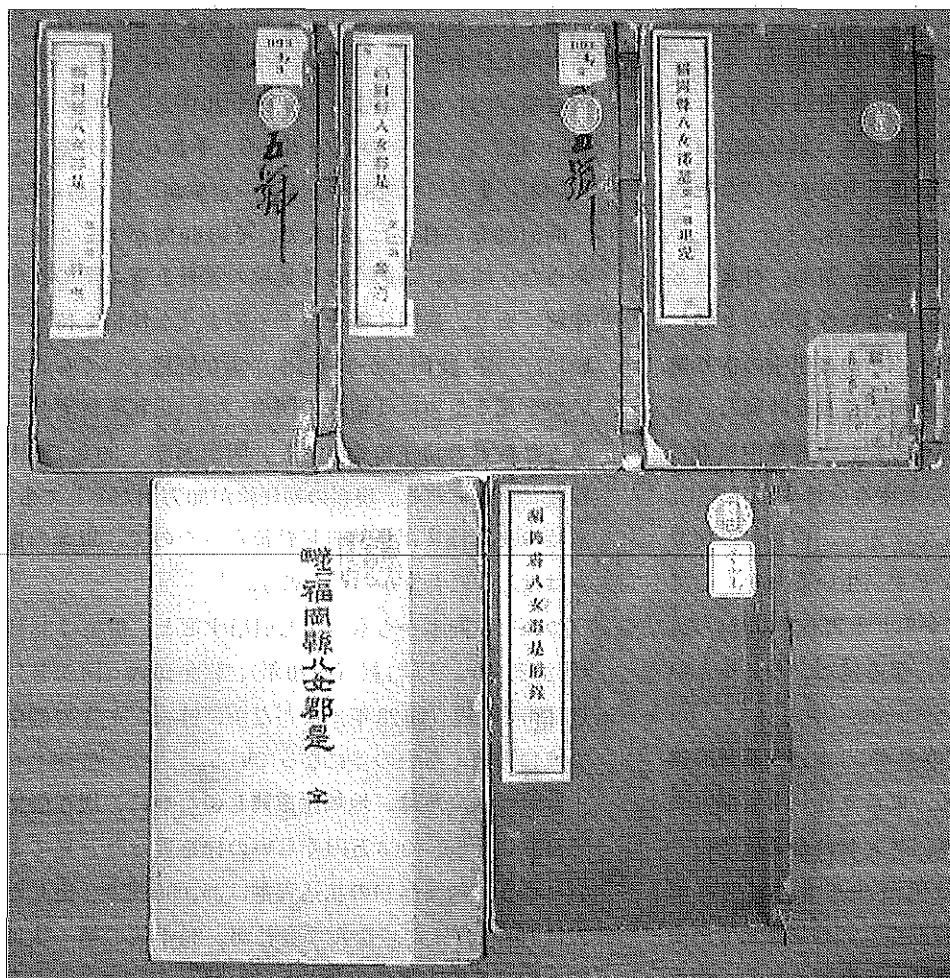
本・BOOKS

自転車は街を救うー久留米市学生ボランティアによる共有自転車の試み 20

一風堂の秘密ラーメン職人河原成美が明かす繁盛店のつくり方 21

お知らせ

..... 22



福岡県八女郡是の正本

(八女市立図書館蔵)

上右 八女郡是第一編 現況

上中 八女郡是第一編 参考

上左 八女郡是第一編 将来

下右 八女郡是第一編 附録

下左 第二回

福岡県八女郡是 全

図書館には、一見木版刷りかと思わせるような「郡是」が5冊保管されていた。よく見ると一字ごとに凹凸があったりするので活版印刷だと思う。各巻の末尾に、この用紙は郡是活動の一部として位置づけられていた「製紙伝習所」の生徒が抄いたものだと書かれている(本文2頁)

地域計画運動の原点は“グンゼ”・“郡是”にあり

——明治の郡是・町村是運動の現代的意義——

糸乗 貞喜

今回の「人もうけ通信」は、今までと少し違う。長い間気になっていた「八女郡是」を見たので、「郡是」との長いつきあいについて書いてみる。

●グンゼと郡是の思い出

「郡是」の原本というモノを初めて見た。本号の表紙の写真がそれである。この実物を見るまでに二十年以上たった。

「グンゼ」という会社がある。婦人用のストッキングや肌着を製造している会社である。これが「郡是」という漢字で書くことを知っている人は少ない。

私の故郷では、私が小学生だった頃は「郡是製絲株式会社」といっていた。そして女性の就業先としても、農村の重要産業であった養蚕の繭の納入先としても重要な位置を占めていた。私の家も蚕を飼っていたし、集繭場にもなっていて「郡是製絲株式会社」と墨で書かれた、大きい木の看板があったように思う。さらにつけ加えると、小学生の「遠足」が「社会見学」というものになった頃（昭和21年）から、郡是製糸は工場見学先になっていた。ただ、遠足も兼ねていたため10km余の道のりを歩かねばならなかった。

この郡是という変な社名が、国是、町是、村是などと言うときの「是＝基本の方針」という意味だと知ったのは、1975年頃だったと思う。その後出張の寄り道をして、京都府綾部市のグンゼ株式会社を訪ねた。印象に残っていることは、対応してくれた総務担当者の「うちは、総務担当者にとって大変な会社なんです。本社を東京に動かせないもんですから、何かと不便です。また株主総会も大変なんです。生い立ちからして小株主がやたら多いもんですから」と言っただけだった。それを聞きながら「なるほど、なるほど、ちょっといい話だなー」と思っていた。

インターネットで検索してみたが、「本社＝京都府綾部市、大阪本社＝大阪市北区、東京支社＝東京都中央区」となっている。念のため、グンゼの企業理念の一部を引用しておく。「当社は明治29年8月、何鹿郡（いかるがぐん、現・京都府綾部市）の地場産業である蚕糸業を振興することを会社設立の趣旨として、創業

者・波多野鶴吉によって設立されました。社名もこの趣旨を反映させて“郡の方針”を意味する「郡是」と定め、地域社会と共存共栄をめざす会社として郡是製絲株式会社（現・グンゼ株式会社）はスタートいたしました……」となっている。

●地域興しのための、一株々主によるベンチャー企業

綾部のグンゼに行ったとき、創業者の「波多野翁講演集」をコピーさせていただいた。この中の会社設立の目論見書に、＜農家の一戸当たりの繭所得を二倍にし、養蚕農家数を一倍半にするための設備を整えること＞のために、「会社の性質は、株式会社なるが故に固より株主の利益を重んずべきは当然のことなるも、設立の趣旨は専ら蚕業奨励の機関たるにあるを以て、特に此の精神により経営すること」とされている。

波多野の思いは、郡内の圧倒的多数をしめる百姓の所得向上にあったのである。資本金は9万8千円と定め、養蚕家が出しやすいように一株を20円としている。第1回の払い込みはその1/4の5円、それも3回分割にしている。まさに大衆的ベンチャー企業起こしであった。

明治30年の株主は721人で、その60%が1～2株であった。結局、この会社は地域の養蚕と蚕糸業の振興機関であり、共同体のセンターのような性格を持っていた。一応、20円とか5円とかが現在価格でいくらぐらいかを見るために「値段の明治・大正・昭和風俗史」で巡査と教員の初任給を見ると、明治24年・30年で8円程度となっている。現在の初任給が30万円だとしても、当時の農家はまだ自給自足経済だったので、現金の重みははるかに大きかったと思う。

ついでに同書からもう少し引用すると、借家は38銭（明治25年）、そば1銭（同20年）、駅弁10銭（同20年）、京都市電2銭（同28年）などだが、借家だと今の価格では10万倍ぐらいの差になっている。

当時の人たちは、地域産業興しのために、現在価格でおおよそ50～200万円ぐらいの株を買ったと見てよいと思う。創業当初の払込資本は25,000円で、出した人は168人だった。こんな会社が、20年後の第一次世界大戦で株価大暴落の折りには、銀行が倒産するのを

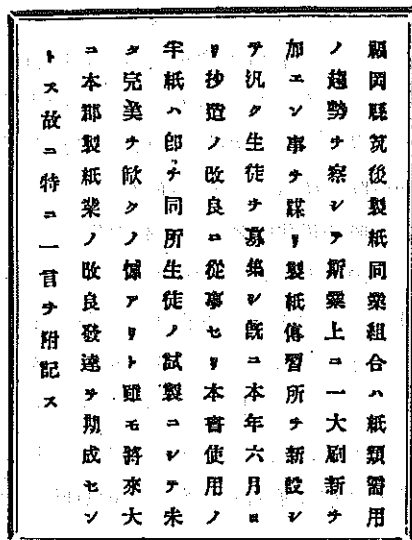


図1 郡是のそれぞれの巻末に付された「この印刷用紙は製紙伝習所の生徒が作ったもの」という文章

見て「郡是なら安心なのでお金を預かってほしい」という者までいたということである。現在の日本の状況と重ねて考えても面白い。

●八女郡是と田中慶介郡長

綾部のグンゼに行った頃から、いろいろな資料によって、八女市にはグンゼの正本が残っていることは知っていた。以前も八女市役所でお願いしたこともあったが、実物を見たのは今年の一月である。

八女郡是を一見して、プランナーの先達のすごさに圧倒された。

田中慶介郡長は非常に優れた人だったようで、郡是に先立って、県下の沿海漁村を実地踏査して「福岡県漁業誌」（漁業の実態及び計画書）をまとめている。その漁業誌が東京・上野で開催された水産博覧会に出品されて、前田正名に認められ農商務省に引き抜かれる。田中慶介が編纂した八女郡是は、よく系統立っている。

明治32～33年に印刷された八女郡是は、第一編現況（現在の事実）、第二編参考（既往現在の事理）、第三編将来（現況と参考とを基礎として将来の計画施設を決定せしもの）、第四編付録とあり、第二回八女郡是は明治44年に再度策定されている。目次だけでも引用したいが、膨大になるので、第一編の序を少し引用する。

「郡是ナルモノハ何カ為メニシテ作レルヤ其非ナルモノヲ去テ其是ナルモノヲ取り之ヲ事業ニ挙テ之ヲ行ハシメメニシテ作レルナリ……」つまり非なるものを取り去り、是なるものを挙げて事業化する、といっている。序の終わりには「之ヲ箱底ニ蔵メテ虫鼠ノ食ト

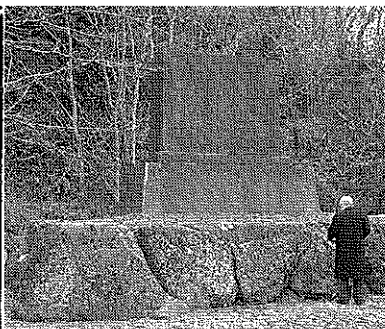


図2 京都知恩院にある前田正名の顕彰碑



図3 顕彰碑の右側に、富岡鉄斎の描いた前田正名全国行脚の姿

為サシムルコト勿レ……読者其意ノ在ル所ヲ察シテ之ヲ實際ニ施サハ則チ未タ必スシモ小補ナクンハアラス是ヲ序トス」つまり箱にしまっておいて、虫や鼠に食わせるのではなく、実行して下さい、といっている。

●八女の特産品の原点は八女郡是？

八女地域には特産品が多い。そのルーツは八女郡是にあるということは知らなかった。今回郡是を丹念に見ていくと、日頃言われている八女の地場産業や特産品が全部出てくる。手漉き和紙、福島仏壇、八女茶、八女提灯、石灯籠、緋などは、以前からあった産業ではあるが、郡是によって一層発展させられている。

郡是・町村是による産業育成は、近年行われている「工場誘致」のように、地域の成り立ちと関わりのないケースはないようだ。当時はまだ国の力は弱かったので、地域づくりを進めるには、地域の主体性が求められていた。今よりも地域自治の考えが強かった。従って郡是のための現況調査にしても「貸借金比較」「貯蓄」「所得」「生産」はもとより、信用組合などの金融機関、同業組合、試験場、講習所などが計画対象になっている。

私の実感でいうと、郡是が取り挙げた範囲は極めて広く、地域全体が「どう生きるか」に込めようとしている。

最近の地域総合計画は、行政計画の要素が強いのと思う。極端な場合には、国から交付される予算（交付税や補助金など）で役所が行う行政事業の予定表のような考え方の計画もある。

ところが八女郡是は、上に挙げたように郡内の産業はもとより、住民組織を含めて、民間の事業を重視し、「何とかして地域を豊かにしよう」という心意気を感じられる。さらに言うと、時間も予算もかけている。そのことを次に示す。

○明治31年3月9日 町村是調査着手の議の訓令

31年度内に完成するよう指示

町村是調査費 2593円2銭6厘 (郡費補助1500円)

○明治32年3月 第一回八女郡是調査委員会開催

(委員13名)、同年10月2日調査完了

○八女郡是調査費 1390円95銭7厘

○八女郡是の発行 第一編 現況 明治32年11月

第二編 参考 〳 32年11月

第三編 将来 〳 32年1月

付 録 〳 33年4月

○第二回八女郡是 全 〳 44年3月25日

なお、郡町村是の印刷用紙は、明治31年に設置され「製紙伝習所」生徒の試製和紙が用いられている。(図1)

当時の約4千円という費用は、ゲンゼ(株)の株式払い込みの比較に用いたデータで見当をつけると、初任給比較では一億円程度、家賃比較では2億5千万円程度になる。

※郡というものが現在なじみの薄いものとなっているが、当時は地方自治の重要な機関であった。私はこの仕事(地域づくり計画のコンサルタント)についてから、延喜式に対応した「郡」が、日常環境はもちろん(流域に対応している場合が多い)、通商や婚姻などの社会的圏域にかかわりが強いことに気がついていた。八女郡是にも「郡ニ自治ノ政事ヲ施行スルハ」というように自治の現実的基礎であったことが印されている。

●前田正名のこと

ゲンゼ(株)の波多野鶴吉も、八女郡是の田中慶介も、前田正名との出会いによって郡是運動に取り組んでいった。前田正名のことを簡単にふれておく。

正名は嘉永3(1850)年生まれの鹿児島藩士で、1865年に長崎の語学塾にて学び、明治2(1869)年にフランス留学、9年に帰国して内務省勸農局に出仕、11年にはバリ万博事務官長および総領事になっている。14年以後勸業関係の職務にあたり、農商務省の『興業意見』30巻の編集をしている。

その後、山梨県知事、農商務次官などにつくが、明

治23年省内の対立の中で辞任して貴族院議員になる。その後、高橋是清などと在野で活動する。全国行脚の中で田中慶介や波多野鶴吉に会っている。その当時の姿を、富岡鉄斎が描いて、その行脚の姿と書が石碑になって京都の知恩院に残っている。(図2、3)

●郡是・町村是運動の現代的意義……私の思い

アメリカという国を考えると、200余年の間ずっと物質の豊かさを求めて走り続けてきたように見える。大牧場経営、ゴールドラッシュ、大農業経営、工業改革(テーラーシステム、フォードシステム)、サービス業におけるマクドナルド方式(ファーストフード)など、現代の豊かさの先導者だった。この意味での役割は大きい。

日本という国の近代は、1600年以降で見の方がよいと思っている。明治以前の300年の近代化の歩みは、

60余州・300藩がそれぞれの持ち味を生かす地域経営を行ってきた。明治に行われた郡是・町村是運動も、地域物産重視で進められた点を見ると、その延長とも見られるが、一方では、近代工業の生みの親・育ての親(インキュベーター)の役割をも担っていた。

土地柄商品奨励・近代化によって開発・増産し、その輸出で稼ぎながら、官営による「大量生産型工業」の導入が図られた。明治・大正・昭和の戦前の時代は、これらのいくつかの成功で、アジアにおける工業国になった。ところが指導者は、「これで世界の工業国になった」と錯覚して大戦争をやり、国民を貧困のどん底に追い込んだ。

戦後は、敗れた欧米に学んで「規格品大量生産主義」に走り、一時は「世界一豊かな国だ」と威張れるまでになった。戦前の日本は「都市の工業化」であったが、戦後は「日本の総都市化」となり、都市化の条件のない地域は「オチコボレ」としての扱いを受けた。

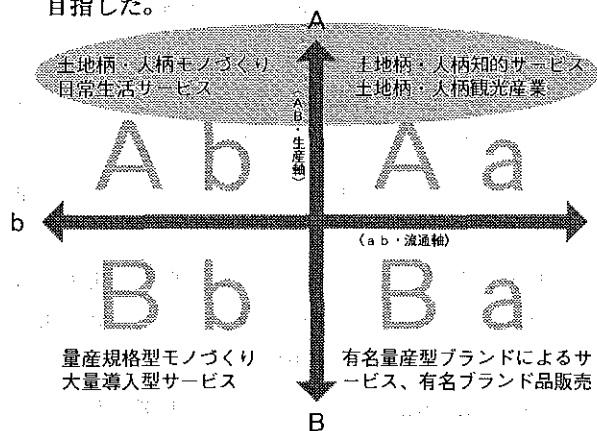
オチコボレは切り捨てられ、農山漁村は過疎化していった。

バブル期の「リゾート」計画などというのは、その農産漁村を都市の外縁部として取り込み、不動産業の「稼ぎの場」として使い捨てにすることだった。いや、本当に、冷静にそういう稼ぎを考えていたのなら、いくらか救われる。ところが、日本中が錯覚に狂奔していたのだからやりきれない。魔女狩り裁判と同じで、それに同調しない正常な人間は、のけ者にされた。日本中が大もうけに走っている中で、その分け前にはあ

地域産業発見型産業分類（個々の生き方発見モデル）

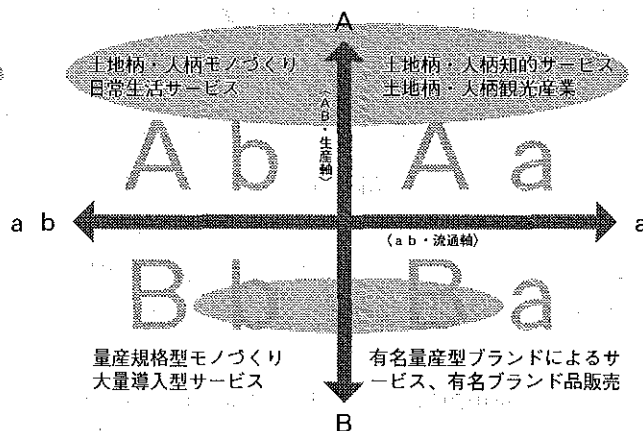
① 17世紀から300年間の産業モデル

300諸藩が土地柄人柄による産業開発で自立経営を目指した。



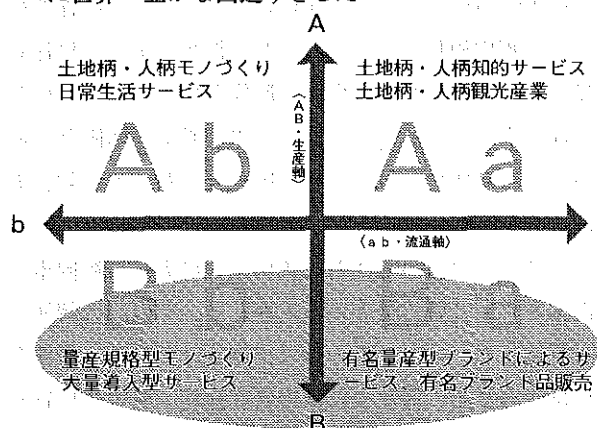
② 明治・大正・昭和の敗戦まで

量産型の工業も取り込んで近代化を図った



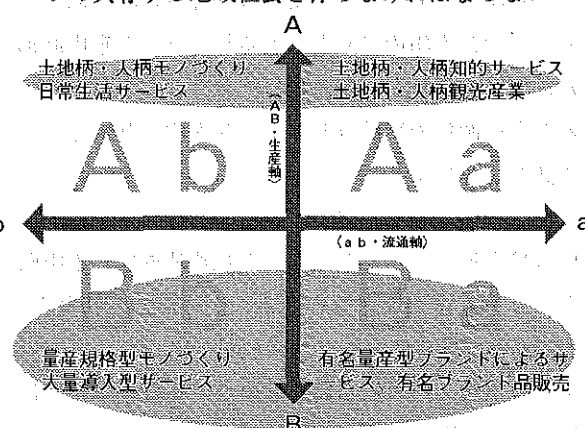
③ 戦後の産業展開

欧米のシステムを導入し、量産型の工業開発で物的に世界一豊かな国造りをした。



④ 今後の地域産業の展開

もう一度土地柄、人柄産業を見直して二つのタイプの共存する地域社会を作らなければならない



ずかれなかった。

幸いにして私は、オコボレにはありついていた。

後には「バブル」という言葉で呼ばれるようになったが、当時の私は「空」だと思ってそれを主張していた。色即是空の空ではなく、単なる「空っぽ」である。このバブルによって、「日本の総都市化」は成功し、今や過疎地にまで都市型の犯罪が持ち込まれている。

バブルは「ハジケタ」といいながらも、バブル以降も「マイナス成長はゆるさん」といって、狂ったままの稼ぎが続くように、無理を重ねてきている。この十年間続けてきた借金による「バブル水準の維持政策」は、膨大なツケを残している。

先の敗戦による荒廃は、ほとんどの国民にとって「ゼロ」からの出発であった。ところが今の日本は、幸

いにしてというか、不幸にしてと言うか、結構、資産も持っている。ということは、資産を持つ層とツケを受け持つ層との間の貧富の差が一層開くということでもある。若い人たちに、途方もない「ツケ」を負わしている。このツケを、いくらかでも減らす為に、少しトーンダウンした方がよいように思っている。

量産は大成功して、かなり豊かになったのだから、これからは郡是運動に学んで「土地柄・人柄主義」産業を、2～3割程度取り戻した方がよいのではないかと思う。そうでないと環境も人々の心も、ズタズタになってしまうのではないかと心配である。

(いとのり さだよし)

東山魁夷画伯の思い出に包まれた 筑豊絵本館

～先生と生徒の“思い”から、全国唯一の絵本館ができるまで～

山田 龍雄

私は、それほど日本画に興味があった訳ではない。たまたま、4～5年前に福岡市内のデパートで開催されていた「東山魁夷画伯展」に出かけ、画伯の本物の絵に接し、その迫力と美しさに感銘した。特に唐招提寺障壁画の「海」の絵の前では、立ち止まって静かに、ただ呆然と長い間見入ってしまった。

これ以来、東山画伯に関する情報は気にしていたのであるが、今年の1月3日の民放テレビで画伯の生い立ちと作品、また自然を見つめ、写生することの大切さなどを紹介した番組を見た。

この番組の中で、田川郡川崎町に「筑豊絵本館」があり、この絵本館の設立者である村上さんと東山画伯とが、何か強いつながりを持っており、この絵本館を創るときに画伯の私的コレクションが贈られてきたという話が紹介されていた。

私は、20数年前から田川市や飯塚などで仕事をし、何度も足を運んだところであった筑豊地域に、東山画伯という大家とつながりのある人がいることに驚き、是非、訪ねて話を聞いてみたいと思った。

1月の中旬、その絵本館を訪ねた。筑豊絵本館は住宅地の一角に建っており、こじんまりとしている。三角屋根でステンドグラスがはめられ、絵本館の雰囲気を出していた。運良く館長である村上さんも在宅中であり、1時間近く、東山画伯とのいきさつや絵本館に対する思いをお聞きすることができた。

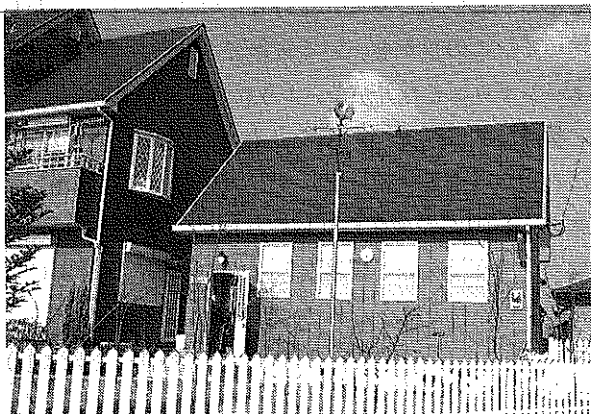
●東山画伯交流は文化祭の「教科書原作者生原稿展」の企画から始まった。

村上さんは、元中学校の教師であり、川崎町（川崎中学、池尻中学）、赤村（赤中学）で筑豊地域の炭鉱隆盛の時代から、炭鉱衰退後まで教鞭をとられ、担当となった子供たちとの日常的なつながりをつくるために日記や詩を書かせていた。特に池尻中学校での子供たちの詩を収めた本が、昭和47年に「筑豊・池尻の子供たち」として出版されている。

東山画伯との出会いのきっかけは、昭和55年に村上さんが川崎中学校2年生の担任となったときの文化祭の企画であった。それは、国語教科書に掲載されていたいろんな話の原作者の“生の字”の原稿に触れさせたいという思いから始まっている。

当時、このような企画は全国どこもしていなかったためか、当時、現存しておられた原作者43名のほとんどの方から直筆の原稿が届いたそうだ。その原作者の一人が東山画伯であった。これを機会に生徒と原作者は身近な存在となり、生徒も原作者の方の本を意識して読むようになったそうだ。この企画は一回限りであったが、話題になったため全国でもまねてみた学校もあったそうだ。

その後、昭和56年1月に東山画伯の方から福岡市で開催された「唐招提寺への道展」と、その記念講演会の招待状が届いた。この時に招待されたのは、講演会には代表2名、展覧会には希望者全員。展覧会に行くにはお金もかかることから、希望者はせいぜい4～5名程度と思っていたが、クラスの24名と他のクラスの23名、計47名が参加し、バスをチャーターして展覧会に行くことになった。この時、村上先生は生徒が静かに絵を見ることができだろうか、騒いで迷惑をかけ



住宅地の一角に建つ「筑豊絵本館」



東山画伯の写真やスケッチが飾ってある絵本館

ないだろうかと心の中では危惧していたそうだが、全くの乗り越し苦労で、生徒たちは本当に食い入るように見学していたそうである。「本物の美に接して、子供たちは身動きもならぬほど感動し、感性が磨かれた」と、村上さんは、改めて本物を見せることの大切さを実感されたそうである。

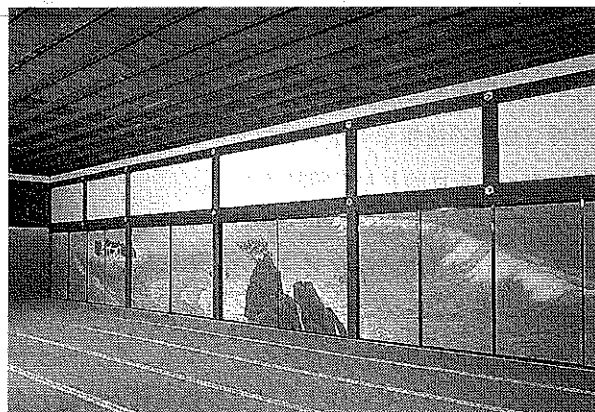
●秋の修学旅行では、東山画伯の計らいで唐招提寺御影堂の本物の障壁画を見学

今度は中学3年生の秋の修学旅行で、どこに行きたいかを生徒たちで話し合いをさせたところ、東山画伯の随筆にある「花明かり」の円山公園のしだれ桜や唐招提寺の障壁画を見たいという希望が強く、京都行きが決まった。

そして、修学旅行の最終日に「唐招提寺御影堂」の障壁画を見ることができた。このことは、実は東山画伯の最高級のはからいがあったからこそ実現できた。御影堂は国宝級であるため、日頃は固く門が閉ざされ、堀の中にも入れない。しかし、この時は画伯の何度かの依頼、あるいは直接、唐招提寺に赴かれての依頼によって実現したのだそう。そんなこともあって唐招提寺の方でも、当日はなんと雨戸をすべて取り払い、生徒たちが全ての障壁画を見ることができるようにしてくれたそうである。この唐招提寺で皆が静かに絵を見ているとき、その時の修学旅行の行程ではほかにも京都で人気の太秦などを見学したにも係わらず、クラスで最も腕白だった生徒の一人が「ここが一番良かった」と村上さんの耳元で囁いたそうである。

●川崎中学校のグラウンドには、円山公園のしだれ桜の直系の桜が植わっている

しだれ桜の話も「教科書原作者生原稿展」から実現したものである。これは同原稿展からのつながりで、



唐招提寺御影堂の障壁画

修学旅行の2日目に京都大学名誉教授の遠藤嘉基先生と京都府立大学教授の傍島善次先生に、学問についてお話を伺い行ったとき、東山画伯の名作「花明かり」のモデルとなっている円山公園のしだれ桜の話になり、生徒が「筑豊でもしだれ桜の花が咲きますかね」と質問したところ、傍島先生が「たぶん咲くでしょうが、調べてみましょう」との返事であった。その後、傍島先生などの計らいで当時、京都府立植物園で育てられていたしだれ桜直系の若木3本が贈られてきたそうだ。

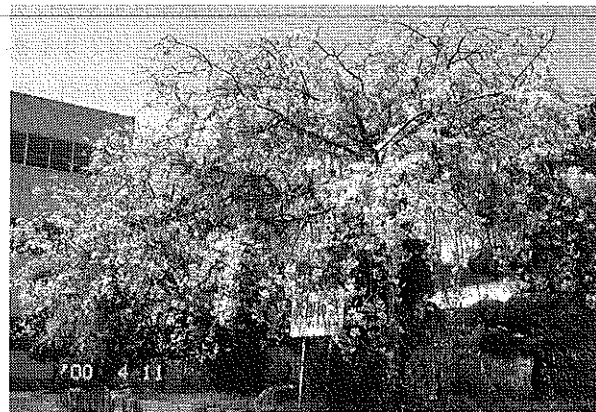
天下の銘木であるしだれ桜が川崎の地に植わっているとは驚きであり、これも美の感動からつながった人たちのネットワークのたまものと言わざるを得ない。

村上さんによると、この話が、有名になりすぎて広まると芽を摘まれるなどを心配したため、植樹当時は関係者しか知らない話となっていた。お話をうかがいに行った日、村上さんも「桜の管理が十分手をつくされていると良いが」と心配されていた。4月にはぜひ川崎中学校に行き、満開のしだれ桜を見たいものだと思っている。

●絵本館設立のいきさつと東山画伯からの贈り物

その後、村上さんは体調をくずし、昭和59年に定年の5年前に退職。その後、一身上の変化があり、今から8年前の平成5年に改めて子供たちやお母さん方が気楽に訪ねられる家を建てようと思い立ったそうである。村上さんの絵本館設立の思いは、自ら出されている機関誌に綴られているので、これを抜粋させていた

【私は教え子たちの子供のことを思った。誰もが優しく思いやりのある人間になって欲しい。しかし、今、子供たちは自然と触れあうことも人と心を通い合わせることなく、ファミコンゲームなどで殺戮と破壊に



川崎中学校のしだれ桜 (2000.4.11)

終止するだけ。(中略) 子供たちが感性を眠らせ破壊されるような時間に置かれているのなら、私のところでは全く反対の時間が流れるような空間を作れないかと考えた。たどり着いたのが、絵と絵本と音楽のある「絵本館」であった」

東山画伯が村上さんの絵本館に私的コレクションを贈るきっかけになったのは、退職後村上さんが出版した「子供たちへの詫び状」の装丁を東山画伯がされた、ヨーロッパ旅行から帰ってきた東山画伯が、たまたまテレビをつけたところ、村上さんが何かの番組に出ていたりとか、いろいろと画伯との縁とタイミングが重なった結果であったようだ。

そして、絵本館への引越しと開館の挨拶を村上さんが出されたところ、東山画伯から電話があり、「レコードをあげましょうか。ただし、モーツアルトは私が必要なのであげられませんが・・・」とのこと。その後、画伯の方から「段ボール28箱分になりました」などの電話があり、美術専門の運送会社のコンテナ1台分の荷物が届けられた。荷物の中には東山画伯に献呈された井上靖、草野心平、三島由紀夫などの直筆の著名入りの本、カラヤンのサイン入りのレコード、画伯の署名入りの画集、画伯夫妻の数次にわたるヨーロッパ旅行の絵はがきアルバム。まだ、世が東山画伯としては知らない若き日に東山新吉の名で装画した童話集等々。

元々、村上さんがこれまで収集してきた絵本などだ

けにする予定であったのが、今は、絵本館の半分は「東山魁夷コーナー」となっており、話を聞きつけて東京や鹿児島あたりからも参観される方がいるそうである。

●筑豊の宝である、この絵本館をどのように維持をしていくのだろうか。

「東山画伯の私的な品々は、全国どこの美術館にも出していない、そんな東山画伯の私的なコレクションを保有することとなった村上さんは、今後、この絵本館をどのような維持していくのが一番良いのか、ずっと考えているとのこと。それは村上さんが東山画伯から頂いた品々はとりも直さず、筑豊、福岡の宝でもあるからだという。

この絵本館は、全国どこにでもないユニークな絵本館であり、筑豊地域の文化発信の一つでもあると思う。

これからも村上さんと仲間で維持され続けることを期待したい。

なお、「筑豊絵本館」を訪れたい方は、館長の村上さんがいらしゃるときには、見学できます。

予約してお出かけ下さい。

住 所 福岡県田川郡川崎町池尻 213-12

T E L 0947-44-9906

(やまだ たつお)

「情報銀行」はまちづくりの拠点

～地域コミュニティづくりの取り組み④～

梶原 里香

「住民参加型のまちづくり」という言葉はよく耳にする。しかし、実際に住民を巻き込んだまちづくりを進めていく場合、どのように仕掛けるのか、誰が引っ張っていくのかなど問題は多くある。

今回はまちづくりに関する情報の拠点を設け、住民と行政が相互の情報発信に取り組んでいる熊本県宮原町の取り組みを紹介したい。

●「まちづくり情報銀行」の開設

宮原町は熊本市から南へ約32km、八代市の北側に位置している。人口約5千人、面積は9.89km²と熊本県内で最も面積の狭い町である。

役場の向かいには、住民参加のまちづくりの拠点となる「まちづくり情報銀行」があり、企画調整課職員が常駐している。

このまちづくり情報銀行は大正14年建設の旧井芹銀行本店（その後肥後銀行宮原支店）の建物を町が買い取り、改修・増築して利用している。平成7年に始まった総合計画策定の過程を住民にオープンにし、誰でもその内容を知ることのできる拠点として、また住民の持つ地域の情報やアイデアを集め、総合計画に反映させることを目的として開設された。

また、住民のサロンとしての機能も持っており、来訪者にボラロイドインタビューとして写真を撮って一言書いてもらい、その写真を張り出すということで人と情報が集まるしかけを行った。今でも、町民同士が世間話やまちづくりに関する情報交換を行う場所となっている。



まちづくり情報銀行

●14の地区を支店として位置づけ、支店長をおく

平成8年度からは町内の14地区をまちづくり情報銀行の「支店」として位置づけ、各支店に「支店長」や「次長」、また、行員ともいえるべき「まちづくり推進員」(14地区で約130人)を置いている。

この支店長やまちづくり推進員は各区の区長の推薦などで選ばれており、地区のまちづくりの運営の中心となる人たちである。とはいえ最初から支店長やまちづくり推進員になる人がいたわけではない。総合計画の中で「地区別計画」を策定しているのだが、この計画を住民と一緒に作っていく中からリーダーが育ったのである。支店長の年齢は30～60歳代と幅広い。

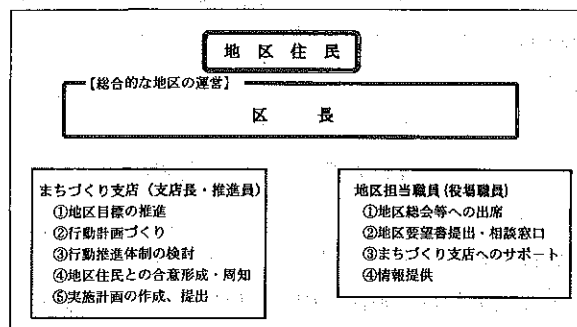
各支店では各地区のまちづくり推進員の会議である「支店会議」、地区住民を対象とした「地区会議」を開いている。この会議では総合計画の「地区別計画」にもとづいて、各支店での年間事業計画とそれに必要な予算を作成することになる。

また、各支店には役場の地区担当職員が2名ずついる(任期2年)。担当職員は支店会議への出席、支店へのサポート、情報提供などを行っている。

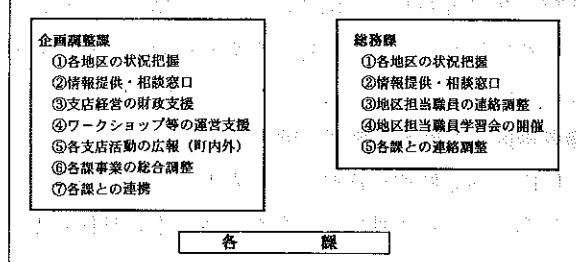
宮原町には既存の地域組織として25の行政区があり、それぞれに区長がいる。支店は14地区なので1～2行政区(最大は4行政区)に1つの支店が置かれていることになる。これまでの区長だけでは新たな地域づくりはできないとの判断から、支店長をおくことにしたのだが、地域組織のトップは区長であることに変わりはないという体制をとったため、スムーズに設置できたようだ。役割についても、区長は住民からの要望や苦情への対処、支店長はこれから先のまちづくりの推進を担うというように分担されている。年間事業計画は区ではなく支店ごとに作られるのだが、区長と

地区のまちづくり推進体制

【地区側推進体制】



【役場側推進体制】



の密接な連絡が必要となり、区長の了解の上で作成される。

●支店長会議で各支店への補助金支給額を決める

14地区の支店長は年に5回程度開催される「支店長会議」に出席する。この会議ではお互いの地区の情報や活動について報告するのだが、会議で悩みが出てうまく活動している支店がアドバイスするなど、お互いに助けあうことができる。

また、支店長会議では各支店が立てた年間事業計画について議論し、その補助金に関する審査を行っている。各支店への補助金は「支店経営補助金制度」に基づいて支給される。

この制度は、地区でどのような取り組みを行うか検討するための支援で、事務費・会議費などに活用できる「行動計画策定支援費」と、行動計画に基づく具体的な取り組みに対する支援で(複数の支店の連携に対する支援も可能)、講師謝礼・研修旅費・啓発費などに活用できる「地区別計画推進支援費」からなっている。この制度への町からの補助金は総額で350万円。年に3回(5月、9月、12月)申請書を提出する。

各支店から出された事業計画とその補助金については必ず支店長会議で審査が行われ(最終的な決定は町長が行う)、この審査を通ったものだけに補助金ができる仕組みになっている。支店長が互いの計画の内容を審査するため、それぞれの計画に立ち入った指摘を行う

こともある。

このような補助金決定の方法を採用しているのは、「活動の主役はあくまでも住民である」という考えに基づくものである。また、これで決定された各地区の事業については、地区住民で計画し行うことを決めた事業であるから、住民が愛着を持って活動に参加しているという。

特徴的なものを1つ紹介する。下宮地区にある「はまどん公園」は、地区公園の必要性が住民から訴えられ、用地の選定から企画・設計、管理に至るまで地区住民主体で行われた公園である。その話し合いには子どもも参加して、どんな遊具が欲しいかなどの意見を聞いている。

●各地区の温度差は無理に縮めない

町内で同じ時期に活動を始めたとはいえ、熱気がさらに高まっている地区と、薄れかけてきた地区など温度差はある。しかし、行政はその温度差を無理に縮めるようなことはせず、それぞれの地区が盛り上がるまで待つ、という姿勢を貫いている。

「住民参加、住民主体」といっても、きっかけは行政職員の意識改革にあった。約10年前に数名の職員が集まって話をしたことからはじまり、今では地区担当職員28名に対して50名が希望するというまでに盛り上がりを見せている。行政が地域の要望に直接応えるだけでなく、地域住民の自己解決能力を高めていく、そのための取り組みを惜しまない。これも、これからの行政の大きな役割だろう。（かじはら りか）

働く障害者・働きたい障害者の応援拠点

～ジョブサポート～

梶原 里香

「障害を持っていても自立した生活を送りたい」と願う障害者は多い。しかし障害者は就労の場を確保することが難しく、また就職できたとしても環境や人間関係で問題や悩みを抱えているひともいる。今回は働く障害者、働きたい障害者のサポートや情報交換拠点である「ジョブサポート」の所長・松本玲子さんにお話をうかがったのでご紹介したい。

●障害者が集まれる場所をつくろう

松本さんはジョブサポートを立ち上げる前は、入所授産施設で働いておられた。授産施設は障害者が就業

に必要な技能を訓練し、社会に出て行く準備をする場所である。しかし就労の場が確保できず、入所者は施設で働き続けているというのが現実である。これではいけないと障害者が「自分の人生の主役になる」ことを目的とした自立プログラムを開始する。プログラムの内容としては、同じ敷地内の従業員アパートの空き室で1～2人暮らしをしてみる、1年間取り組みたいテーマを各自決めて取り組む、そのテーマを達成するために毎月のプログラムを作成し取り組むといったことである。

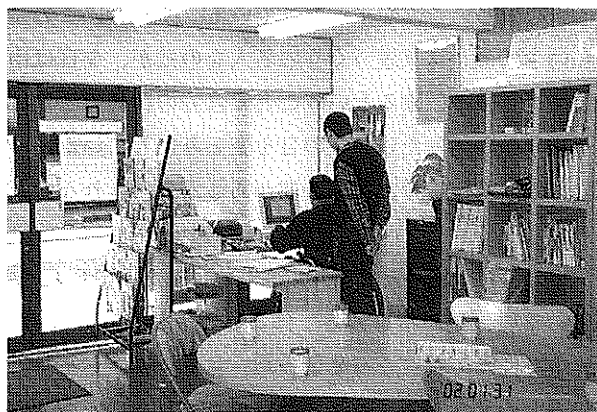
そして2～3年後、次のステップとして公団のアパートを借り施設の外で生活し、施設に通所することを始める。今まで一人暮らしなどをしたことがない人が多かったが、実際に施設の外での生活を始めてみると、共同生活の窮屈さ、我慢を強いられていたことなどに気づく人が出てきた。そしてこのプログラムがきっかけで自分でアパートを借り、通所で施設に通う人も出た。これらのことを通して、障害を持つ人が施設や家庭だけではなく、年齢相応の生活（一人暮らしや結婚生活など）を選ぼうと思えばできる、それには大げさな仕掛けを用意しなくてもいい、という確信が持てたそうだ。

また施設にいたのでは限られたサポートしかできない、ということを松本さんが考え始めていたことから、授産施設で一緒に働いていた池田幾世さんと、「障害者が働くとはどういうことか。働く環境は現状で十分なのか」を考える「ジョブサポート研究会」を1997年に立ち上げた。この研究会の中で、障害者の自立・就労などの課題について考える講演会を開催したり、障害者3,000人を対象にした「障害者の就労に関するアンケート調査」などを行ったりした。このアンケートを行うための費用は助成金などをもらえなかったため、松本さんと池田さんで負担したそうである。

これらの活動を通して障害者が働くためのサポート拠点が必要であると感じ、「障害者が気軽に集まれる場所をつくろう」ということで2000年4月、福岡市より補助金を受け作業所という形で「ジョブサポート」を開設した。「ジョブサポート研究会」は現在も続いており、月1回の会報の発行や講演会などを開催している。

●公共交通機関へのアクセスが便利で人通りの多いところにつくる

現在ジョブサポートで働いている人は25名。働く日



ジョブサポート内の様子

数・時間等については、一人ひとり生活における「働く」ことの重みや障害の度合いなどが違うため、個別に相談しながら決めている。常勤スタッフ4名（1名は障害者）のほか、プログラム開発やホームページ作成、旅行の取り扱いについての専門家が5名いて、学習会をしたり、サポートする体制をとっている。この専門家のみなさんはそれぞれに仕事をする傍ら、定期的にジョブサポートにでてきている。

仕事は、旅行の相談・企画・取り扱い、プログラム開発、ホームページ作成、データ入力、テープおこし、バラエティーバザー、マッサージ、封入発送作業・加工作業、福祉機器・介護機器の相談、障害者の就労や生活相談等を行っている。データ入力やテープおこしなどが多いそうだが、利用者一人ひとりがレベルアップできるような仕事、ということになるとなかなか難しいとのことであった。

利用者はもちろん、相談に来る人にとっても公共交通機関へのアクセスが便利なところ、そして働いている障害者の姿を地域の人に見て欲しい、見慣れた光景になって欲しいという思いから、福岡市東区馬出の商店街にある空き店舗を借りている。最寄りのバス停・地下鉄駅から徒歩1分、JRの駅からも近く、市内だけでなく春日市や宗像市、古賀市などからの利用者にとって便利という評判だ（自分の車でしか通勤できない人も多く、駐車場も必要である）。近くには県庁や警察本部、大学病院などが立地していることから人通りは多い。ただ、今の場所は少し手狭なので近くにもう1ヶ所作業所を増やす予定とのことだ。

●地域との交流も盛んに行われている

地域や小・中学生との交流も盛んに行われている。一昨年、馬出公民館で行われた人権講座で障害者につ



小学生が発表会のために作った新聞

いての話をしてほしいとの依頼を受けた。その時松本さんの提案で、小・中学生、民生委員等の地区団体とジョブサポートの利用者が一緒に馬出地区のバリアフリーチェックをすることになった。秋ごろ地区を見てまわり、年度末には公民館で小・中学生による発表会も行われた。

このときから小・中学生との交流は続いている。ジョブサポートに体験学習に来たり、障害やバリアフリーについての勉強に来て、その発表会を行ったり。そこでつながりができた小学生が学校帰りに遊びによることもあるそうだ。また、小・中学校から依頼をうけ利用者が講師として赴くこともあ。

●これからは地域支援もやっていきたい

企業で働いている障害者のサポート・相談にも応じている。ジョブサポートで働いていた方が現在までに2名企業に就職されたとのことだが、お互いに情報交換を行っている。

そして企業で働く人の悩み相談、障害者を雇用している企業のサポート、企業で働きたい障害者のために情報を集めたり、一緒に面接に行ったりということにも取り組みたい、また今までは働くことのサポートが中心だったが、日常生活レベルや介助者への支援、地域支援などもやりたいということが目下の目標となっている。

松本さんは「ここに来ることで外へ出ていくきっかけになったり、いろんな人に出会うことの楽しさを知ってもらうことも効用の一つ」とおっしゃっていた。私がおじゃました日も4人仕事をされていたが、とてもいきいきしているなという印象を受けた。「働くこと」が生活の中で持つ意味の大きさを感じた1日だった。

（かじはら りか）

民設。でも公共スペース『筥崎公会堂』②

～山口県阿武町発ふるさとあったか便～

愛甲 美帆

●かずら細工、わら草履に挑戦しよう！

1月27日、筥崎公会堂で山口県阿武郡阿武町の林業振興会（以下振興会）との交流イベントが行われた。今回のイベントの企画は、筥崎放談会（以下放談会）のスタッフで山口県出身の梶山裕子さんが、以前山口でローカル番組のリポーターをしていた頃の縁により実現した。当日は、振興会の皆さんに教えてもらうかずら細工・わら草履・森のクラフト教室と、ナメコ汁、ムカゴ入り竹筒飯、特産品の販売が行われ、冬空の寒い中、まちと里山のにぎやかであたたかい交流の輪が広がった。

●教えたり、反対に教えてもらったり

振興会のメンバーは、林業の経営者はもちろん、町の職員の方や県の農林事務所の職員の方も含まれている。今回は83歳のおじいさんから24歳の若手まで20名が参加した。

イベントの前日には、放談会・公会堂の若手スタッフと振興会の交流会が行われた。振興会副会長の白松博之さんが、木の枝を輪切りにした手作りの名札を作ってきてくれた。「この枝は、白松さんの山の木の枝だったのだなあどんな山だろう」と想像が膨らむ素敵な名札を胸に料理を囲み、あちらこちらで話しに花が咲いた。

当日は、公会堂のオープンデッキと近くの駐車場と屋外で行われる予定で、前日のしぐれた天気を心配であったが何とか晴天に恵まれた。準備をしていると、



先生を囲み、昔の技を習う

近所のおじいさんがやってきている。聞くと、このおじいさんはわら草履づくりの名人なのだが、今日は山口県から教えに来るということで自分の作り方とどこが違うのか知りたいとこの日を楽しみにしていたそうである。教室まで、まだ時間があるが待ちきれないようだった。

教室には主婦や家族連れ、学生など54名が参加した。わら草履は足の指を使って作るの、皆裸足になり、先生を囲んで輪になって習った。私も以前からやりたかったかずら細工に挑戦した。用意されていたかずらは太いものから緑の細いツルまで様々であった。この緑のツルは、時間が経つにつれて黒くなり、しっかり作れば長く持つ丈夫なはずだそう。友達3人と参加したが、日頃はよく話す4人も初めての籠づくりで、かずらの弾力を感じながら夢中で作った。各教室では、先生に習った学生が今度は自分で小学生にわら草履の作り方を教えていたり、参加した人が作る籠の形を見た振興会の人「へえ、この形は珍しいねえ。こんな編み方もあるのか。」と逆に感心する場面もみられた。

場所が商店街の道路沿いなので、道行く人がその様子を覗いていき、周囲には多くの人だかりができた。

●一過性のイベントで終わらせない

振興会は、阿武町を知ってもらうため、またまちの人が何を求めているかを知るために、春の「山菜狩り」、夏の「間伐体験と木工教室」や林業・農業体験の受け入れ等様々な活動を行っている。その交流を通して阿武町のファンになった人（各地に散在している）で構成されるメーリングリストを持っており、そこで企画の内容を話し合ったり、イベントのお手伝い募集などのお知らせを流したりしている。

この日も、以前振興会にお世話になり、その後福岡に住んでいる方など数人が手伝いに来られており、振興会の人に混じって「おいしい椎茸はいかがですか？」と道行く人に声をかけていた。

放談会では、今回が初めて他の団体と共催の参加型イベントだった。当初は「ふるさと体験！わら草履・かずら教室」のチラシを見れば多くの申し込みがあると考えていたのだが、思うように集まらず、カフェ万福館に食事に来た人や、各個人のネットワークに呼びかけたことで多くの参加が得られた。今後、広報の仕方やイベントの運営については更に工夫が必要という課題も出てきた。この阿武町との交流を始まりとして、

次は放談会が阿武町に遊びに行こうという話や、公会堂が振興会の木工品等を販売する阿武町のアンテナショップになっては？という意見も出てきており、更に人の輪が広がっていきそうである。(あいこう みほ)

地元沸き上がり型のイベント 小倉の食市食座で食べ歩き

尾崎 正利

今年2月1～3日に北九州市小倉北区で開催された第2回「食市食座」の催しに、協同組合地域づくり九州の仲間であるイグス・システムアトリエからお誘いを受けた。

北九州市には、合馬のタケノコや小倉牛、玄界灘と周防灘、豊前海に面するゆえに恵まれる新鮮な魚介類など豊富な食材があり、さらには焼きうどん発祥の地など数々の料理のいわれもありながら、そうした食の魅力や実力は外部には意外に知られていない。

また、市の玄関口であるJR小倉駅近くには駅前商店街と魚町銀天街という大きな商店街があり、市民の台所的な存在の且過市場はあるものの、元々飲食店の数は少ない。

そうした中、食を楽しめる、美味しいものを味わえるイベントを地元の手作りでやろうということで開催されたのが昨年の「食市食座」であった。今年はさらにスケールアップしているということであった。

当事務所からは2月1日、2日の2日間にわたって、食べ歩きに出かけた。

●昼～この日は商店街も市場も多くのお客の姿

この「食市食座」のイベントでは、アーケード街に臨時で設置されたテーブル、百貨店のパサージュ広場、且過市場の中などの数カ所で、決められた時間に1皿(1杯)300円程度で料理の試食ができ、またマグロ解体などの料理人の技の実演も紹介される。料理を振る舞うのは市内の有名飲食店や高級店、ホテルのシェフなどで味の方は逸品だとのこと。例えば、地元でも有名な結婚披露宴などで使われるレストランなどが出品しており、普段は一人数万円の豪華な料理を出すところが、この日は「だんご汁」を出す。

私たちが昼過ぎに訪れたとき、小倉玉屋の広場では既に昼の部は終盤にさしかかっており、売り切れの品が続出。それでも海鮮ちゃんこ鍋、クラムチャウダー

スープ、大根とスペアリブのスープをお腹に納めた。

●且過市場～市民の台所は普段の1.5倍のお客

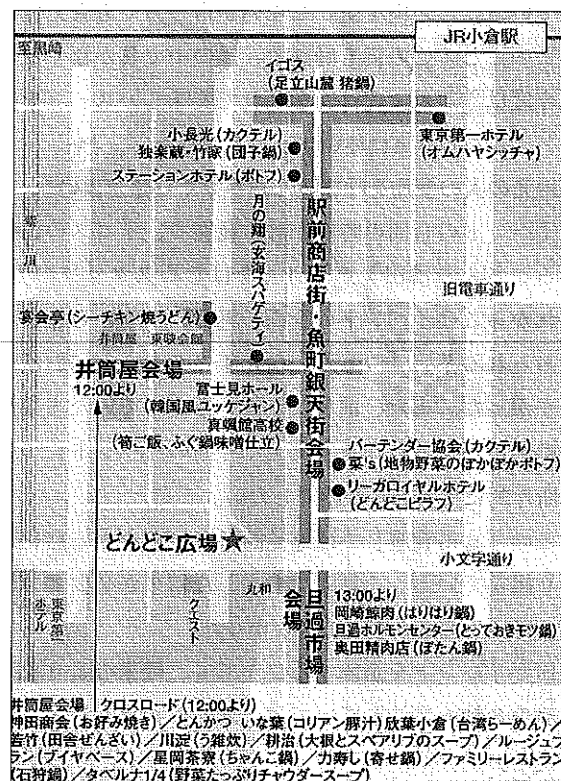
且過市場に足を伸ばしてみた。昼時間のイベントでは鯨肉と水菜でハリハリ鍋の予定である。この市場には魚・野菜・練り物・惣菜・餅・漬け物・鯨肉・乾物・茶など、安く豊富で新鮮な食材を売る小さな店が無数に並んでおり、買い物ついでに食事や休憩場所になる、焼きうどんやおでん、鶏かつ丼、うどん、寿司などを出す店も多い。

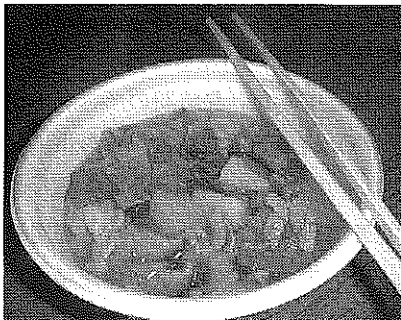
ハリハリ鍋のコーナーに行くと、果たしてまたもや売り切れ後。結局、食い逃してしまった。

この市場にはこれまで何度か足を運んだが、今までにない人通りの多さである。イベント効果なのか、若いカップルの姿も目立つ。休憩に立ち寄った焼きうどん屋のカウンターでは、魚屋の隠居さんがビールを一人で飲んでおり「今日は人通りが多くていいなあ、いいなあ」と懐かしげで嬉しそうだった。

鍋を食べ損ねたので、代わりに塩鯖、シシ肉とキムチと鯛の糠炊きを購入した。肉屋さんの話では「食市食座」の試食でシシ鍋のうまさに驚いて、そのまま材料を調達した肉屋さんの名前を聞いて、こちらに買い物に足をのばした食いしん坊もこの日は結構いたらしい。

2月2日の出店テーブルマップ (パンフレットより)





シシ鍋一杯300円



高校生のスタッフたち



バーテンダーグループのカクテルのテーブル

●夜の部～人気の逸品には行列が

夜は魚町銀天街アーケードを中心に、商店街の通路の約10箇所のポイントで5時30分スタートで試食テーブルが営業を始める。宣伝効果が効いたのかスタート前から既にズラリとお客が並ぶ。準備中の各テーブルをみてまわると、一番人気は真蕨館高校のテーブルのフグ鍋、合馬の筍ごはんのようだ。バーテンダー協会のカクテルのテーブルにも多くの人が並んでいた。

各テーブルの一斉開店と同時に試食している人の姿があちこちに見られた。中には早くもハシゴしようと急ぐ人もいた。

私たちを誘ってくれたイゴスも一つテーブルを出しており、ここでは足立山麓のイノシシで鍋を作っていた。山地の多い北九州市には案外イノシシが多く、農作物に被害も出しており、害獣指定で駆除の対象になっている。この肉を生かせないか市の方でも考えているとのこと。この鍋も好評で、鍋の中で具がなくなると今度はうどん・ごはんを入れて美味しいスープを余すところなく見事に使い切っておられた。

●地元の人の参加を呼び込んだ手づくり感がよい

イベントの合間の時間が許す範囲で、イゴスの山口ひろこさん、溝田美恵子さんをはじめスタッフの方、それからこのイベントの企画・実行に当初から関わっておられる茶店「つじり」の辻年之さんなどにお話をうかがった。また、前日にお誘いを受けていた当事務所の本田が受けた印象も交えて今回のイベントについて断片的にはあるが紹介したい。

- ・この「食市食座」では地元商店街11組合が一緒に取り組んでいる。これまでそうした結束が必要と分かってもなかなかできなかった。
- ・何かイベントを企画するにしても、従来のように外部の会社へ発注しては、地元根付かないと考えた。

- ・イベントでは2月の閑散期に何とかしようということとで危機感を持った20数名で実行委員会を組織した。
- ・小倉の商店街そのものがこのままではいけないという意識もあった。
- ・テーマが「食」だったのは小倉のネームバリューを広域的に広めたかったから。それに新潟で行われていた食のイベントを視察して、小倉でもできるのではないかと呼びかけて、それから徐々に協力体制が生まれた。
- ・出店している店の多くは商店街の外部からの参加である（ざっと数えてみると7～8割）。百貨店や郊外で営業しているレストラン、高校など今まで街と関わりがなかったようなところが非常に多く参加していた。
- ・「とにかく自分たちでできることをやろう」といってポスター500枚をもって1軒ずつ商店街を回って貼ってもらうように頼んだ。その結果、街の各所、食に関係のない業種の店のウィンドウにもポスターがみられるようになった。
- ・今まで町内会や商店街でどこからか回ってきた大量のポスターが実際には殆ど貼られることがなかったというから、実行している人の顔の見える活動は重要なことである。
- ・チラシも各お店がディスプレイの一部としておしゃれなブリキのバケツに入れて置いたり、市場の魚屋さんのマグロの隣に置いたりして見せようという努力がなされた。
- ・イベントそのものの「清潔感」をイメージさせたのは地元の真蕨館高校の料理科の生徒さんたちが試食サービスをはじめあらゆる機会に参加して、白の上下に白エプロンの格好でテキパキと働いていたことが大きい。

・設営関係の力仕事から配膳、後かたづけ、客引きの声かけまで元気に行っており、学校の勉強を生かしながら自分たちでも楽しんで参加している様子であった。

・もう一つの「清潔感」はゴミの処理や掃除などを各出店テーブルが徹底し、商店街側も協力的であったのが大きい。

●地域全体の食の魅力が街の新しいイメージづくりに
辻さんは「2～3週間だけの人気だけでは意味がない。もっと継続できることにつながれば」と、このイベントや小倉の街の賑わいづくりの課題を語っておられたが、今回の催しにお客の立場として参加した感想から言えば、地域の食の魅力が集まって、いろんな人が小倉の街に足を運んでいたことから、結果として小倉の街の新しいイメージ形成に随分役立っていると思う。

食で町おこしを図る地域は多いが、飲食店だけでなく、高校の調理科の学生さんや市場、バーテンダー、ホテル、百貨店など、食の要素に引かれるいろんな人の協力を集めて取り組むところを見たのは私は初めてだ。

また街の中を食べ歩きさせるというのも良かった。試食が美味しければ「自分でシシ肉で何かしてみよう」とか「おみやげに何か買っていこう」という、プラスαの目的外消費をつい余計にしてしまう。そして、今回参加していた店には次回小倉に来たときに立ち寄るかもしれない。

現在、同じ県内にあるキャナルシティ博多（福岡市）では全国のラーメン店の有名どころを一箇所に集めたラーメンスタジアムという企画が大変な人気を集めているが（こちらは平成14年6月までの半年間と期間は長い）、小倉の「食市食座」は、それと全く対照的であり、地域の味を拓げるために地元の参加を呼び込んで既存の街の空間を使っているのが面白い。

今回は小倉という大きな街での取り組みだったが、地域の食の魅力をもっと大事にすれば、九州各地でもいろんなことができるのではないかと感じた。

（おざき まさとし）

地域のファンで支えられたまちづくり

～長府、仙崎の町並みを歩いて～

小田 好一

●武士姿で散歩！？

下関市長府は萩毛利家の支藩で五万石の城下町であり、高杉晋作が長府の功山寺で挙兵し、明治維新への道が開かれたことでも有名である。

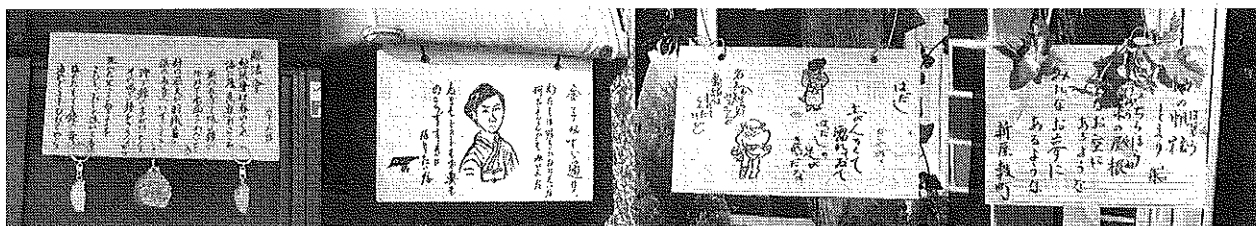
歴史的な町並み事例を探していたところ、長府の観光振興がおもしろいということを噂で聞いた。長府のまちには土堀が多く残っており、新築の時に建主が自主的に土堀を設けるなど武家屋敷の景観づくりに対しての意識が高いことがうかがえる。

事前に連絡をとっていたので、観光協会青年部の代表の方に案内を受けることになった。代表の方とあと3名が、驚いたことに武士の姿で現れた。刀（おそらくダミーだと思うが）を差し、さすがにちょんまげは結ってなかったが、足袋に下駄とどこから見ても武士の姿である。聞けばこの方々も観光協会青年部の方であった。

武士姿で観光ボランティアやどこかの出し物に出演するのかと思っていたが、そうではなかった。気が向いたときに武士姿で長府のまちを散歩するのだ。それで観光客に何か聞かれれば答える。散歩も義務ではなく、ただ好きなときに好きな恰好をして、好きなように散歩をしているだけである。ただ、この散歩姿は観光客の目にも留まるらしい。普通の感覚だと一人で武士姿になって近所をうろろするのは非常に勇気が要るものと思われるが、ここ



最初会ったときは武士姿にびっくりしたが、しばらくすると不思議と慣れてくるものである。



各家庭で思い思いのプレートが下げられている。

の場合「それが全く平気」という方が6～7名、「一人じゃ恥ずかしいが誰かについていくのならOK」という人が約10名ほどいるという。彼らで「馬関浪士会」というグループをつくっている。何も決まり事はなく、決まった行事もなく、別に義務もなく、イベントなどの情報が入ればメンバーに流している。何事もゆるやかだがヨコの連携がとれているというグループである。

最近、トップダウンのまちづくりや地域振興（行政が企画してだれかにやらせる）を目にすることが多く、やらされた人が本当に楽しんでやっているのか疑問だった。馬関浪士会の方々は、自発的に好きなことをやっていてそれが観光振興につながっているボトムアップのいい例である。

●みんなが参加できるみすゞのまちづくり

最近、金子みすゞがブームになっている。テレビ番組で取り上げられ、ドラマがあり、舞台があり、映画化もされた。この金子みすゞの故郷が山口県長門市仙崎である。ここは蒲鉾で有名だが、最近全国的な金子みすゞブームで観光客が訪れるようになっている。金子みすゞの生家「金子文英堂」のある通りは「みすゞ通り」と名付けられており、仙崎へ行ったらJR仙崎駅から観光ガイドの話に沿ってみすゞ通りを歩きながら金子みすゞの生い立ちや詩の説明、くじら漁で栄えた仙崎の集落の話が聞くことができる。

ここでも面白い取り組みがなされていた。「仙崎まちづくり協議会」（住民主導の協議会）の発案で町並みの各家の道から見えところに金子みすゞの詩を書いたプレート（木の板）を下げようということになった（プレートは協議会が準備し各家庭に無料配布）。

その結果、各家で「詩に絵をつけたプレートにしよう」「どの家にもない詩を下げよう」「プレートのまわりを飾り付けしよう」など、住民の間で競い合っ様々なプレートをつくるようになった。これが、観光客を楽しませてくれる要素の一つになった。このプレートはもう一つ、地元の人に対しても役目を果たして

いる。仙崎の集落では日常的に新屋敷町、鍛冶屋町などの旧町名が使われている。新しく住んだ人にとってはどこまでが何町なのか分かりづらい。そこでみすゞの詩と一緒に旧町名を書こうということになった。そうしたら、どこからどこまでが何町なのかが一目で分かる。観光振興だけではなく地域のコミュニティの形成に役立っている。

古い町並みを活かした観光振興を進めるとき、商売をしていない家では振興に貢献しにくいことがあげられる。貢献できなければ観光に対する関心も薄れてくる。しかし、仙崎のみすゞプレートは、商売をしていないところでも観光振興に貢献することができる良い例だと思った。長府の例と同様、住民が盛り上げていくボトムアップの構図ができあがっている。

今後、地域でのみすゞファンをもっと増やして盛り上げていってほしいと思う。（おだ こういち）

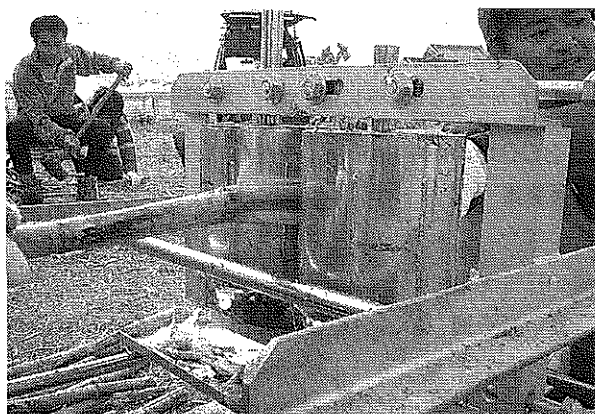
近 況

黒ビールは一番絞り、さとうきびは三番絞り

大木町の青年団と福岡市東区の「やかまし村青年団」が中心となって行っている黒砂糖づくりに参加した。この黒砂糖づくりのきっかけは、3年前に（株）大木町健康づくり公社の野田昌志さんが、「町の空いている畑を使って楽しいことをしたい」という話を「やかまし村」のメンバーに持ちかけたことから始まり、定例の会合で、沖縄出身の人と酒好きの人の意見で、さとうきびを作ってラム酒を作ろうという話であったそうだ。

「やかまし村」は、東区の市民センターの「東区白書を創ろう」という青年セミナーに集まった人たちがせっかく集まったのにこのまま終わってしまうのはもったいないと自主グループとして再結成したものである。

飛び入り参加歓迎ということで、今回は初めて参加したのだが、二日目への参加だったので、サトウキビを切り取る作業はなく、前日に切って置いたものか



しぼるのはけっこうな肉体労働

ら、さとうきびの汁を絞り出す作業から手伝うことになった。サトウキビは、竹のように節があるために、まずハンマーで節を砕いて、絞りやすくしないとけない。そして、人力の手絞り機にかけて、絞り汁を取る。ハンマーでたたいた程度では、なかなか一回で汁を絞り出すことができず、結局三回目に絞ったときに一番多くの量がとれた。疲れが溜まってくると、できれば作業を増やしたくないという思いが強くなり、途中で二回目の絞り方をきつくるなど、楽しんで作業するアイデアを試してみたのだが、そうすると今度はサトウキビを絞り機に入れて引っ張るのに力を使いすぎ、よけいに疲れてしまった。途中から、ビールを片手に作業を始めたので、誰ともなくビールが一番絞りがいいけど、さとうきびは三番絞りがええんやなあと話していた。

絞ったエキスを布で二回ほど濾過をして、生石灰を入れて火にかけたのだが、側溝に廃材を入れて燃やしただけの炉だったので、火の調節がうまくできなかった。そのせいか、できあがった黒砂糖は、確かに色は黒いのだが、テカテカと光っており、どうも焦げていた。勇気を出して、口に運んでみたところ、なんともいえないビターな味だった。ただ、中にはうまくいった黒砂糖もあり、それは茶色でくすんだ色をしていたので、簡単に判別できた。

できあがった黒砂糖を活用して、サーターアンダギーも作ったのだが、これが一番おいしかった。やはりおいしいものをつくったという感動があると、つらい作業が報われた気がした。

肝心の目標である、「さとうきびからのラム酒づくり」は、残念ながらその場で作り方を知っている人がいなかったの、とりあえず残ったサトウキビの汁をタン

クに詰めて次回へと持ち越すことになった。

後日になって、大木町でラム酒を作っている方を発見したらしく、今度はラム酒づくりをやるそうである。

うまく作れたらよかネットパーティーでお披露目したい。
(本田 正明)

小麦は深く繊細で、粉に巻くよりグルテンに巻く
～アジア麺文化研究会～

これまで「アジア麺文化研究会」では、長崎のチャンポン、ド・ロ様ソーメン、一風堂のラーメン、承天うどん、椎葉のソバ、等、色々な麺について、食べて、食べて、学んで、食べて.. してきた。

今回は、麺の基礎である「粉」にこだわり、福岡市那ノ津にある太陽製粉㈱で小麦粉について学ばせていただいた。

○手打ち、手延べ、機械打ちとは？

太陽製粉㈱は、九州に数ある製粉会社の中で生産規模も有数であるが、国産小麦の生産量で抜きんでているそうだ。ここでは、その国産小麦を、石臼で丁寧に引いている。その関係からか、製麺業を営む方も多く参加しており、この日の説明ではいつも増して小麦や麺に関する専門的な話がとびかっていた。その中でもグルテン（※）の話が私のような素人にはわかりやすく、おもしろかった。

うどんの手打ち、手延べ、機械打ちではグルテンの「方向」「つながり強さ」が全く異なるそうだ。

以下、表にまとめてみた。

	グルテンの 方向	グルテンの つながり
手打ち	全方向	強い
手延べ	一方向	強い
機械打ち	一方向	弱い
手打ち：本鉢でこねて、棒で平らに伸ばし、切る。 手延べ：ソーメンによくあるように、両端を持ち引っ張って細く伸ばす。 機械打ち：うどんの種を押し出し延圧で成型する。		

特に、全方向にグルテンを伸ばす手打ちでは、グルテンの結びつきがより強く、これが、モチリ感やこしの強さに現れるのだと納得した。

また、ソバはある程度の訓練で誰でも打てるようになるが、うどんは塩と水の配分が難しく、気候や湿度にも左右されると聞き、かなりの知的作業であることをうかがった。



白衣に着替えて工場見学

○小麦粉はひとくりにできない

小麦粉は、強力粉、中力粉、薄力粉があって、国内産か、国外産かぐらいしかしらなかったが、工場を見学させていただき驚いた。工場は精選→製粉→精製という行程が進むが、一番面白かったのがふるい機だ。とにかく大きな機械が細かいシェイク、シェイクの動きで、粉を受け、目の粗い網からガラスのように見える網まで、様々なふるいにかけてられた小麦が最後には70種類にも「ふるい分けられ」出てくる。それを、ブレンドしたものが我々の手に届けられる。

ここでは、アメリカ産（3種）、カナダ産（1種）、オーストラリア産（3種）、国内産（3種）を取り扱っているという。

国内産についていうと、筑後にある九州沖縄農業研究センターで研究された「チクゴイズミ」がおいしい麺用粉としてあげられていた。参加者の中には、その粉を直接研究・開発された方もおり「うどん用の麺にこだわりすぎたため消費が伸びない」という反省も聞かれた。

○小麦粉だけを作る！のではなく、口に入るまでが意識されていた

この日の「食べる」の研究では、「讃岐うどん」「きしめん」「稲庭うどん」の順で太陽製粉㈱の社員の方が手際よく配膳して下さった。

製粉屋さんだけに麺はもちろん美味しかったが、讃岐うどんはつけ麺で濃いめのだしで、きしめんは温かくし薄口醤油でさらりと...等、ダシや出し方にまでこだわりがみられた。そのダシが後味のよい上品なもので、サクリとした天かすが引き立てていた。

粉という物を生産しているのではなく、最終型の食べ方まで意識しながらモノづくりをされているのだな

あと感じた一日だった。（澤谷 真紀子）

※グルテン：小麦の種に含まれるたんぱく質の主成分。ねばねばしたかたまりで、水に溶けない（新明解国語辞典）

図 300坪の小宇宙……「こだわりの塊」博物館探検隊員募集

つばた しゅういち・英子夫妻の「思いの塊」博物館へ行って来ました。（図1）

長い長い間、お誘いを受けながら何年も経って、やっとこの目で見てきました。家に着いてまず最初に、奥さんから「この家には玄関がありませんのよ。そこからどうぞ」と言われて、縁側のような所から上がる。後でアントニン・レーモンドの本で示しながら、その麻布のアトリエの一部を再現した家だと聞いた。アトリエの方々に玄関がついているはずもなく、なるほどとは思ったが、それは後の話。はじめに聞いたときは、「えっ」と思った。とはいえ入り口は十分に広い。

つばたさんにお会いするのは、1989年以来だと思う。私がリゾート計画を受注していて、指導・応援をさせていただいた時以来のはずである。当時のリゾート計画は、「リゾート」とは名ばかりで不動産・マンション販売企画でしかなかった。ディベロッパーの中では、日本中の田舎に高層マンションを建てるという空気が充満していた。わが計画地区の参加メンバーにも、ディベロッパーやゼネコンが何社か参加していた。その人達からは「5,000億円かできれば1兆円の計画にして欲しい。3,000億が最低限だ」などといった要求が出ていた。私の計画は、当初2億円ぐらいの公共側の計画で、民間の投資は第三期ぐらいだった。私に対する参加メンバーの評判は極めて悪く、「話にならん。会社に帰って説明もできん」と言われ、私は「そんなバカな話は絶対にない。空論だ」といって突っぱねていた。「そんなものが売れるはずがない。あなたは買う気になりませんか」といって渋々納得というよりも、あきらめさせていた。

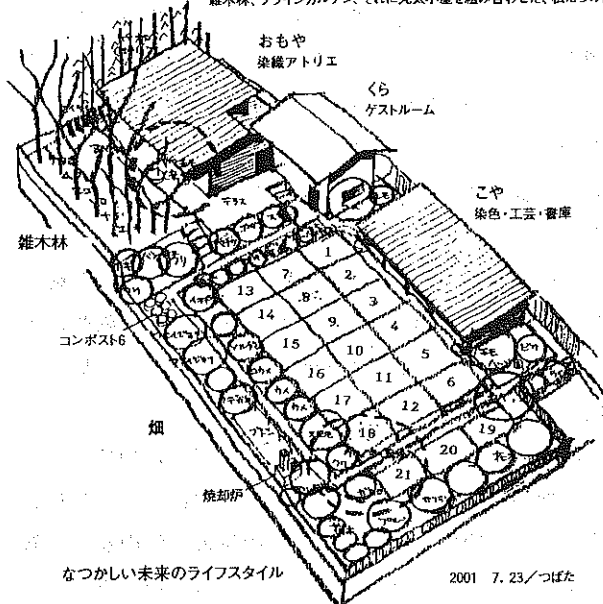
話をもとに戻したい。

奥さんには、もちろん、はじめてお会いした。お茶をいただいているうちに、なぜかご飯の話になり、ご飯を炊く土鍋の話になった。その土鍋を見せながら、その「うまさ」について講釈をされ「よし絶対にそのメシなるものを食うぞ」と決意した。

これ以降読み続ける方は、気の毒ながら、私の受けた「もてなし」について、延々と自慢され続けること

都会の中の、現代・田舎暮らしのすすめ

雑木林、クラインガルデン、それに丸太小屋を組み合わせた、私たちの住まい


 25年の時をためて／手にした私たちの住まい。
年間120種類の野菜果実が収穫できるようになりました。

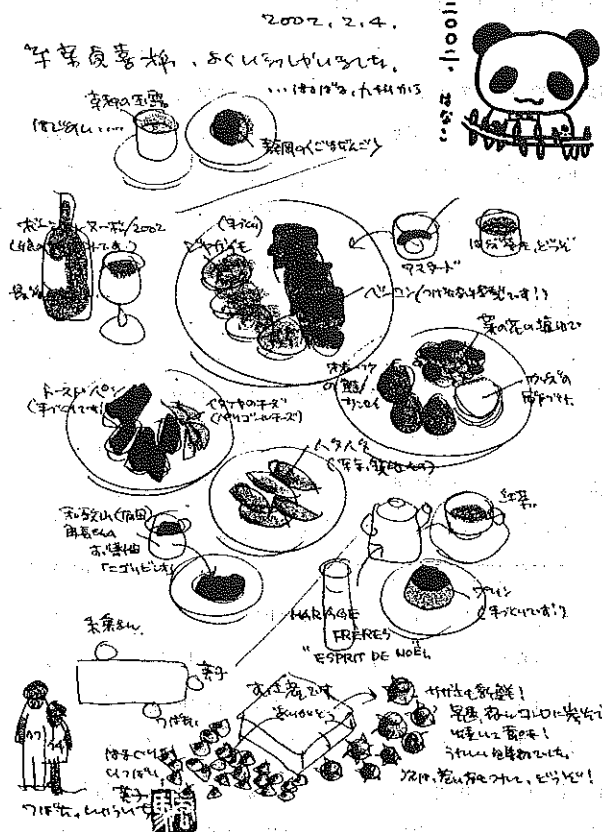
▲
 図1 300坪の小宇宙…こだわりの塊博物館
 図2 取材メモつき手描き色つき写真 ▶

になる。というより先ず、反省からはじめたい。

減多にないことだが、当日、私はカメラを持っていなかった。数日間出張が続くので、腰痛が心配だった。そのことをブツブツ呟きながら、お話を聞いていた。家に入って話を聞き始めても、メモを取らなかった。「これはもう一度直出しだな」と覚悟を決めていたからである。

ところが4～5日回り道をして、糸島の我が家に帰ってみると、先に「取材メモ」つきの「手描きで色つきの写真」が届いていた。このページに載せてある図2がそれである。つばたさんの家で色々もてなしを受けて、その上に当日写真機を持っていなかった私を見て、この手回し。これは恐るべきことです。

あとは、つばたさんの「手描き色つき写真」に沿って説明するだけ。まず始めに、京都の玉露と静岡のゴマ団子をいただいた。ついで、「これはね娘が」ダースをプレゼントしてくれたボージョレヌーボーの最後の一本なんですよ」といいながら注いでいただき、つばた家特製のベーコンとジャガイモの炒めたものをあじわう。そこへオホホックの鮭の薫製と菜の花の和えものに蕪の酢づけ。ついで手づくりのトーストパンにイタリアのパリゴールチーズ。このチーズは塩っぱい



がいい味だった。ハタハタの一夜干しも、もともと魚が良かったのか塩加減とともども上味だった。

「ベーコンや鮭の薫製につけた方がいいかな」ということから醤油の話になった。和歌山湯浅の「角長」さんの「ニゴリビシオ・濁り醬」の新しいピンをわざわざ開けていただき、味わった。紅茶、手づくりのプリン、ハブ茶もいただいた。図の左下にはご夫妻の年令まで書かれている。77才、74才。その右上がテーブルの配置図。図の右下は、小生が持参した糸島のハマグリとサザエ。

以上が、小宇宙のうちの300分の1ぐらいに当たるテーブルの上の話。食べながら地元のケーブルテレビがやった3分×12ヶ月のビデオを見て、話を聞いた。そして外に出て300坪を案内してもらった。それらはすべて省略。なお、ビデオテープは糸乗がもっている。ダビングは相談にのります。

紙数がないので、「探検隊員募集」の話に移る。予定は午後一時頃名古屋の高蔵寺ニュータウンのつばた邸着。三時間ぐらい、ベーコンを作るための煉瓦の炉はどうして作ったか(次に来られたらベーコンを作りましょうね…と言われている)、コンポストでどうして肥料を作るか、などを見聞します。人数に大制限がありま

す。四月上中旬の金土日頃。申し込みは糸乗まで。

(糸乗 貞喜)

「奇術」のおかげで首が少しだけ楽になった

本誌54号で首が痛くなった話を載せたところ「自分も同じ苦しみを抱えている」という人は結構多いようで、かなりの方から連絡をいただいた。

そんな折、今年に入ってイゴス・システムアトリエの山口ひろこさんから「奇術マホイ」なる先生を紹介された。曰く「体の悪い箇所をその先生に触られると涙が出るくらいに痛い」「腎臓や胃潰瘍の悪い人も結構良くなった」「首やヘルニアは得意中の得意」「どこも悪くない人には無理に手を加えたりはしない」。

私の病状は、しばらく整形外科にかかったせいもあって大分状態は良くなったが、日によってまだ頭が上から押さえ込まれるような違和感がありスッキリとはしていない。こんな状態が、もう4ヶ月も続いている。

山口さんには昨年のベトナム旅行の腹痛のとき梅エキスを助けてもらったこともあり十分に信用できる。「とにかく一度来てみたら」と言われ、気軽な気持ちで指定されたお寿司屋さんに土曜日の朝9時30分に向かった。「すし小山」に入ると、大将はお店の仕込みの最中で、店の奥の間では私の前のお客さんが先生に対面しているようだ。

座って待っていると「ここは痛いですか？これはどうですか？」「痛くないです。あっ、痛たたっ！」とかやりとりが聞こえてきて不安感がふくらむ。

本当は一抹の不安があった。人には遠慮してとても言えなかったのだが「奇術マホイ」のイメージが一人歩きして、心の中で色々といけな想像をしてしまう。その先生はたぶん、鎖のついた眼鏡をかけて、口ひげを生やし、マントを来ていて、先が尖って上を向いた靴を履いて、ステッキを持ち、シルクハットが似合う、そんな人に違いない。

いよいよ私の時間になったので、靴を脱ぎ3畳ほどの畳の間に入ると、姿勢のいい白髪の先生がニコニコ顔で待っていた。隣では奥さんが新聞を捻げて眺めている。差し出された名刺をみると「奇術マホイ」と書いてある。想像していた奇術の先生とはかなり違った。それに日本人だった。

ここでの手順は、まず痛みの箇所・状況、体調を紙に書いて、それから話をしながら体の悪い箇所に触れていく。私の場合は首だ。「はい、ここを押しています

から、無理しないで首をどこまで横に向けられますか？」といわれて右を向こうとするが、痛みであまり顔が向けられない。「そこまでですか？そこまでしか曲がりませんか？痛いですか？」と聞かれるので「はい」とか「いいえ」とか返事をしながら言われたように少しずつ縦・横に首を動かすようにしてみた。5分間ほどして「はい、先程と比べてどうですか？」といわれた。動かすと本当に不思議なことで、首がかなり軽く動かせる。先生の説明では頸椎と頸椎の間の軟骨の変形だから、まずは動かしやすいように首の周りの筋や筋肉をほぐしたのだという。

時間に余裕があり、心の余裕も出てきたので、ついでに他の部分も見てもらった。畳の間にうつぶせに寝そべって、腰回りから足のヒザの付近、背中などを触ってもらくと、これが非常にくすぐったい。ガマンできずに体をモジモジしていると「もうこれはどこも悪くなか」と言われた。これを胃腸や腰の悪い人にやると泣くほど痛いそうである(翌週、その評判を聞いてフラフラと訪れた新入社員の日は、ひざ・腰・ひじ・足首・頭など全てが悪いということで「もう何遍か来い！」と異例の宣告を下されたらしい)。

大体30分が過ぎたので、小山の大将に謝礼を預けて店を出たのだが、マホイ先生には「もう大丈夫」といわれた。そして、あれから2週間以上経つが、その後も首が軽くなった状態は続いている。興味のある方はご一報を。

(尾崎 正利)



自転車は街を救う

～久留米市学生ボランティア
による共有自転車の試み～

水色の自転車の会 編
新評論

最近、道路が新しく整備されても「なんでこんなに車優先なの？」と思うことがよくある。車は大変便利であるけれど、日頃の生活で車を使わない人も大勢いて、その人達が歩きにくい街に魅力があるだろうか。

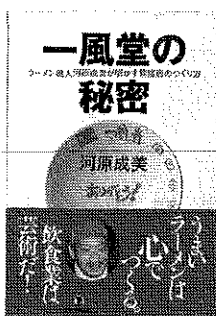
この本は、「自転車を交通手段の中核にして、久留米市を人と自然にやさしい街にしたい」と1998年久留米大学の学生9人を中心に結成されたボランティアグ

ループによる取り組みの記録である。

久留米市は、福岡県南部に位置する人口約23万人の街である。市には九州最大の大河筑後川が流れており、「水色の自転車の会」というボランティアグループの名前は川の川にちなんでつけられた。彼らが考えた共有システムは「利用しやすい場所に、無料で、時間制限なく、乗り捨て自由な自転車」を街に配備するというものである。利用する立場からの使い易いシステムで、市民の善意が前提となっている。

彼らは、市より放置自転車を譲り受け水色にペイントし、ブレーキやタイヤなど安全性を確かめた上で配置していった。しかし、一言で自転車の整備・配置といっても、当初はペンキ代は皆の手だしでまかない、配置・回収についても、各自の乗用車を使い、時には自転車に乗って行き、配置した帰りはバスやメンバーの車に頼るという方法をとっていた。そこで、活動資金を得るため自転車に広告をつけてもらうスポンサーを集めていく。自転車の管理をもっとすべきだという声もあるが、しかしそれでも自由に利用できる点が水色の自転車の存在理由だという自分たちの意志を貫いている。その一方で、「市民が活動に注目してくれていて、スポンサーもとっているからいい加減なことではない」と彼らは言う。

自分たちでできることを考え責任をもって行動してきた「水色の自転車の会」の活動が「人と自然に優しい街にしたい」との思いを、その名のようにさわやかな風となって街に広げ、少しずつ変化を起こそうとしていることに頭が下がる思いである。（愛甲 美帆）



一風堂の秘密

～ラーメン職人河原成美が明かす
繁盛店のづくり方～

河原 成美
経済界

一風堂のラーメン店は地元はもちろん、全国的な人気ラーメン店になっている。本屋に行くと「一風堂の秘密ラーメン職人河原成美が明かす繁盛店のづくり方」という本が並んでいた。別にラーメン店を出したいというつもりではないが、「うまいラーメンは心でつくる」という帯の文字が気になって買ってしまった。

ある町で関わっている中心商店街活性化の業務でキーワードにしたことは、いかに各店舗の魅力アップであった。本誌55号の表紙には「地域経営の柱さがしモデル図」というものを出した。中心地の小売店は大型店と同じフィールドでは競争できない。だから人柄・土地柄型の特徴あるものに移行していくことが必要となる。この本に書かれているのは人柄型の店づくりの心構えだと思う。

河原成美さん（一風堂の親会社「株式会社力の源カンパニー代表取締役」）は大学卒業後、芝居を志し、喫茶店でアルバイトをして生計を立てていたが、1979年、著者の兄の紹介でレストランバーをオープンする。連日繁盛し年収1,000万円の目標も達成することになるが、毎晩酒浸りで、お客をわかせる「酔いどれ」で終わっていいのかと考えるようになった。その後、次のステージを考えるようになり、その答えがラーメン店だった。以前のレストランバーのお客は若い女性为中心で、著者自身が大好きなラーメンについていろいろ話を聞いていた。すると「（ラーメン店は）汚い、臭い、怖い、女の子だけじゃ恥ずかしい」というマイナスイメージを持っていることが多かった。そこで考えついたのが「女の子が気軽に入れるラーメン店」だった。これまでのレストランバー感覚でラーメン店をつくることに決めた。このほか、味はもちろんのこと、接客サービスなど様々なところにこだわりを追求して一風堂をつくりあげてきた。

著者は「飲食業は演劇だ」と主張している。第5章の「繁盛店のづくり方」では店づくりを舞台に例えて項目立てしている。「演出家コンセプトを決める」「演目と配役商品開発」「脚本家台本を書く」「舞台のメンテナンス基本の大切さ」などである。なぜ、飲食業が演劇なのかという答えは、著者にとってラーメンは自己表現の場であり、舞台と同じく「人に感動を与えることができる」ということだった。

中心市街地の小売店は多くの場合、大型店のように大量仕入れできないし、結果それほど安くはないかもしれない。一風堂のラーメンは福岡のラーメン料金の相場からすると高く設定されている。しかし、その値段以上に客に対して感動を与えているのが人気の秘訣なのだと思う。ラーメンファンの人でなくても楽しく読める本だと思う。（小田 好一）

協同組合「地域づくり九州」にてDM発行

～地域が儲かる計画づくり～

昨年の4月に当社を含め、9社の地域づくり、専門家が集まり、まちづくりのトータルコーディネーターとして、経済産業省と国土交通省2省庁の認可の協同組合を設立いたしました。

今年の協同組合事業として有志が知恵を絞り、タイトルに示しているような趣旨でまちづくりを自治体と一緒に考え、実践していくパンフレットをつくりました。2月はじめには九州、沖縄、四国、中国地域の各市町村へ発送いたしました。この企画書では4段階で仕事をしていくことを示しており、市町村の要望に応じて各段階毎の調査と計画づくりをお手伝いしたいと考えています。興味のある方は、(株)よかネットまでご連絡していただければ、パンフレットをお送りさせていただきます。

パンフレット表紙の文面の一部

自分たちの住む地域を儲かる地域に変えていくために

～国営地方公共団体から民営地方自治体へ～

地域でつぶれても役所がつぶれない時代は終わり、地域が生き残れないと役所もつぶれる時代になっています。これからは「地域を豊かにする」「地域の雇用を増やす」「自慢できる地域にする」という地域経営の視点が必要です。

私たち協同組合「地域づくり九州」のメンバーは、地域経営・地域づくりを皆様と一緒に、取り組みたいと思っています。

仕事は段階毎に、はじめをつけながら取り組んでいきます。

ステップ1 地域の良さやウリ探し



ステップ2 テーマ決め、ネットワーク探し



ステップ3 体制づくり・実行チームづくり



ステップ4 地域づくりに実行

連絡先：TEL 092-737-0113 FAX 092-731-7671

e-mail: info@yokanet.com

RXA04312@nifty.ne.jp

第10回よかネットパーティーのお知らせ

人と人との交流の輪づくり“ひとつもうけ”の場として行っております「よかネットパーティー」も今年で10回目を迎えます。

いい話・おいしい食べ物・紹介したい人などの持ち寄り参加型パーティーとして行う予定です。

今年もたくさんの方の御参加をお待ちしております。

詳細は次号のよかネットで御案内致します。

日時：平成14年5月18日（土）13時～

場所：警固神社境内（福岡市中央区天神）

編集後記

「おはようございます！」といつものおじちゃんの元気な声。昨年の秋頃から毎日お昼前にビル5階にある当事務所に弁当を売りに来て下さっている方だ。野球帽がトレードマークでいつもにこやか笑顔だから、事務所の空気を明るくほぐしてくれる。390円の日替わり弁当は女子所員達になかなかの人気。毎日何個かは売れている模様。もう馴染みになった所員も。時々、差し入れまであってお茶とかパンとかお菓子など頂く。「弁当安いのに…。おじちゃん儲からないよねー」とか話しながらしっかり食べています。聞いたところでは年金生活の身で「楽しいから」やっているとのこと。世の中いろんな活躍の場があるのだなあとと思う。（ざ）

よかネット No.56 2002.3

（編集・発行）

（株）よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

名古屋事務所 TEL 052-265-2401

東京事務所 TEL 03-3226-9130